

「道しるべ」

毎日が幸せだった。

「このまま時が止まればいいのに」

それが私の口癖だった。

子どもたちの成長が愛おしく、少しでも長くそばにいたい。そんな思いで毎日を過ごしていた。何気ない日常が宝物で、子どもたちと過ごす時間のすべてがかけがえのないものだった。

絃彬、倫彬、紗彬。

三人の子どもたちは、私に「愛」を教えてくれた。笑いで、甘え、愛らしいその姿が、私の幸せそのものだった。

だから事故のあと、私は何度も自分を責めた。

「あの時、時が止まればいいと願ったから、本当に神様は時を止めてしまわれたのだろうか」

助かるはずがない状況の中で、私は生かされた。

救助されたとき、「これからの人生を精いっぱい生き抜こう」と胸に誓った。それほど目の前の光景は壮絶だった。

絃彬の救助を諦め、「ひろー!」と叫びながら、倫彬と紗彬の救助を選んだ。

あの日の選択を、私は自分で許すことができない。

事故から二十年。

私は神様に問い続けた。

「どうして私を生かされたのですか」

「生きることがこんなにも苦しいのに、生かされている意味は何ですか」

その問いを抱えたまま生きてきた。

そして今、ようやく私なりの答えにたどり着いた。

絃彬、倫彬、紗彬が、この地上に確かに生まれ、深い愛の中で生きたことを伝えるため。

太陽に向かって咲くひまわりのように、笑顔いっぱい、私に甘えながら生きた子どもたちがいたことを伝え続けるため。

その命を語り継ぎ、未来へつないでいくために、私は生かされたのだと思えるようになった。

事故から一年後、私は四人目の命を授かった。

「愛おしい子」という想いを込めて、愛子と名付けた。

その後、真実、ひかり、寛彬が生まれ、私は七人の子どもの母になった。

私にとって七人は、誰ひとり欠けることのない大切な子どもたちである。

だから私は、これからも七人の名前を同じだけ呼び続けたい。

絃彬、倫彬、紗彬、愛子、真実、ひかり、寛彬。

名前を呼ぶたび、一人ひとりの笑顔が浮かび、私の心の中で生き続ける。

ある歌に、こんな一節がある。

「球根の中には、花が秘められ
さなぎの中から いのちはばたく
寒い冬の中 春は目覚める

沈黙はやがて歌に変えられ
深い闇の中 夜明け近づく
過ぎ去った時が未来を拓く」

(球根の中には―麗愛歌21―から引用)

事故から二十年。

私は、「そんな日が本当に来るのだろうか」と何度も自分に問い続けてきた。

苦しみも、悲しみも、今も消えることはない。

それでも、暗闇の中で生き続けた先に、小さな光を見出すことができた。

私の苦しみや悲しみが、いつか誰かを支える力になるのならこの苦しみも悲しみも生かされる。

私が歩んできた人生が、生きる希望を見失いそうになっている誰かの心に寄り添うことができるのなら。

今、苦しみ、悲しみの中にいる人たちの道しるべに、私はなりたい。

大沼 かおり



					(順不同)								

企画・制作／西日本新聞社メディアビジネス局

上記の行政、企業、団体等の協力により「飲酒運転撲滅キャンペーン（チームゼロフクオカ）」を推進していきます。企業、団体等から協賛いただいた浄財は、本キャンペーンの啓発広告や啓発イベント実施、関連グッズの制作等に使用いたします。【チームゼロフクオカ】問い合わせ窓口：西日本新聞社 業務推進部（電話 092-711-5466）<https://team-zero-fukuoka.com/>